

流れを読む

白頭のワシは強し

荘銀総合研究所理事長 牧口 徳幸

アメリカの強さをまた見せつけられた。四月十四日、バブルではないかと懸念されていた株式市場はニューヨークダウ、ナスダック共に史上最大の下げを記録し、世界中を震撼させた。あおりを受けてヨーロッパもアジアも東京も大暴落となった。しかし、週明けから落ち着きを取り戻すと共に世界市場も沈静化し、改めて世界が経済的にアメリカに大きく依存していることが分かった。アメリカ国内では今回の調整は健全なもので、過熱気味の景気を軟着陸させるにはむしろプラスであると冷静に受け止められている。

何故アメリカはこんなに強いのか、そして我が日本は十年不況を経てなお明るい展望が開けて来ない。日本には日本の経済があるとノウ天気な事を言っていないで謙虚にアメリカの強さの秘訣を探り、十年先を見据えながら二十一世紀の日本を構築して行かなければならない。まず目立つのは優れた国家運営能力と当局者の強い責任感である。FRBのグリーンズパン議長は、四年前の九六年にニューヨークダウが六千ドルに乗せた時、根拠なき熱狂」と言って懸命に抑えにかかった。にも拘わらず、アジアの通貨危機やロシアのデフォルトで世界が

パニックに陥りそうになった時には果敢に行動を起し、二カ月間に三回も金利を引き下げて世界危機を救った。八十年代のバブル期の日本と何と違うことか。第一は長期的施策の適切さである。レーガン時代「双子の赤字」と揶揄された財政赤字と対外赤字のうち前者は遂に克服された。好況によって自然に達成されたのではない。サプライサイダーの誤りを是正し、歳出の徹底的削減をブッシュ・クリントン両政権下で増税という国民に不人気な政策を敢えて採る事によってである。それで金利が低下し、産業が活性化して株価が上昇し、投資魅力を増大させて世界中の金を惹きつけるという好循環をもたらし、第三は労働市場の流動性である。レーガノミックスの成長貢献はこの点で最も顕著。組合潰しを褒めているのではない。制度疲労を起こしたシステムは如何なる犠牲を払っても作り替えなければならぬ。所得格差の拡大という問題はあるが、失業率は大幅に低下し、一般の人々の生活は明らかに良くなっている。更に移民等で世界中から集まる若者たちによって人件費等が低下し、アメリカの生産性は成熟国で最も高い。最後は百年に一度の大変化たる情報通信革命だ。インター

ネットが経済社会をどう変えていくかは未だ不透明であるが、百年以上前の鉄道の建設や電気の発明以上の大変動を起こしつつある。その先頭にアメリカが立っている。発展途上国の低賃銀を活用することは、同時にそれらの国の成長を促し人々の生活向上をもたらす。世界中の成長加速が大きな渦となって二十一世紀を「希望の世紀」へと導いて行く。これが本当の平和の配当であり、そのパイオニアたるアメリカが史上最長の好況を続けているのはそうした裏付けに因る。フロンティアが開けている時のアメリカは強い。

日本も悲観することはない。二つの希望の星が輝いている。一つはもちろんIT革命だ。技術面の優位性と同質的な集積社会は情報通信革命の浸透を早める。携帯電話の普及は猛烈なスピードで、あつと言つ間にアメリカを追い越した。もう一つは今後十年間、世界の成長センターは再びアジアだ。地理的に最も近いという有利性を持つている先進国は日本だ。こうした時代の変化に適應する体制転換が緊要だ。急げ日本。アメリカの国鳥ハクトウワシは再び力強く舞い上がった。